

本を選ぶ

- ワクワク本
- 知財は全教科対応の万能コンテンツ
- 広く深い学習支援を目指して
- DMかたろぐ

2020年(令和2年)4月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

<https://www.las2005.com>

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

ワクワク本

五味 遼由

学校の一斉休校で、中学生たちは思いがけない長いお休みをどんな風に過ごしたのだろう。新学期を迎えた中学生には、こんなワクワクするような本で心をくすぐってみたい。子どもたちを見守る大人の方々にも驚きいっぱい読んでいただけたらと思う。

『女子中学生の小さな大発見』(清邦彦 編著/新潮社/1999年)は、静岡の私立女子中学校の先生が、毎週発行する「理科だより」に掲載した中学1年の研究レポートをまとめたもので、とにかく面白い。テーマごとに紹介されたレポートは、「Kさんによると、プールで息を吐いてゆくとどんどん沈んでゆくそうです」、「Iさんの家のネコは音の高さによって耳の角度が変わります」など、身近で小さな発見ばかり。中には、「Oさんは万歩計をつけて寝てみました。朝までに12歩、歩いていました」とか、「Tさんは河原で石炭を発見しました。でもお父さんは“それは春のバーベキューの跡だ”と言ってます」とか、思わずのけぞるようなものも。

「生徒たちの研究、発見を、多くはあえてコメントを加えず、生徒のやったまま、考えたままを載せてある」ため、「中には間違っているもの、何のためにやっているかもわからないものも含まれている」という本書だが、生徒たちが何に興味を持ち、

観察し、驚いたかを、「科学の原点」としてまると受けとめてくれる清先生のまなざしが温かい。

次は、佐藤優『十五の夏』(幻冬舎/2018年)上下巻。元外務省主任分析官で作家の佐藤氏が、高1の夏休みにソ連・東欧を一人で旅行した、その詳細な記録である。佐藤少年が、中学生時代に学習塾で面白い先生たちと出会って社会主義に興味を持ち、実際にソ連や東欧をこの目で見てきたいと、自分で旅行を計画し、旅行会社を訪ねるところから話が始まる。1975年。今のようにインターネットもなく、資本主義国の日本からの旅行者は、国家レベルで厳重警戒されるような時代に、一人で飛行機を乗り継ぎつつ旅行するということがどういうことか。高校入学の「御褒美」として、ご両親が積極的に送り出したことにも、「私だったら出来るだろうか」と思わずにはいられない。

この本の面白さは何と言っても、旅行先で出会った人たちとの会話、街の様子、食べた料理などが、手に取るように具体的に描かれていることだろう。佐藤少年の記憶力・記録力・観察力に驚かされる。

最後にもう一冊、小林宙『タネの未来 僕が15歳でタネの会社を起業したわけ』(家の光協会/2019年)も紹介したい。中学3年生で伝統野菜のタネを販売する会社を興した、小林宙くんの奮闘記である。宙くんは、現在のタネ事情についてわかりやすく説明し、地域の伝統野菜を守ることがなぜ大切なのか教えてくれる。全国各地に地域固有のタネを探しに行ったり、畑で無農薬野菜を育てたり。「タネ」に夢中な宙くんが家族が協力する様子も楽しそうで、ワクワク応援したくなる。(ごみ ゆう)

知財は全教科対応の万能コンテンツ

—『すごいぞ！はたらく知財～14歳からの知的財産入門』—

浅間 麦

ものづくりを支える権利

世間はコロナ騒ぎで大変だ。1年前だったらのんきに花見の計画なんかも立てていた時期なのに、いったい世界はどうなってしまうのだろう。

昨年のごごろはもっぱら、今回ご紹介する「すごいぞ！はたらく知財」の取材や編集作業に精を出していた。著作権はともかく、商標、特許などの法律とは縁遠い私が本書の担当になったことは、この世に「ものづくりを支える権利」を広める使命を与えられたのだと思うことにしていたので、今回もその使命を果たしたと思う。

利用と運用

本書は文学、ゲーム、アニメ、映画など、「作品」を作ったり運用したりする11の仕事を取材し、各取材対象者が自分たちの知的財産(知財)をどう守り、活かしているかをまとめた事例集だ。

本書をとおして素人なりに理解したのは、知財とのつきあい方には2種類あるということ。それは「利用すること」と「運用すること」だ。利用は、すでにある作品を二次利用して新しい作品を生み出すこと。運用は、作品から収益を得るために商品化することだ。読者が作り手側なら前者、プロデュースする側なら後者の事例がより興味深く読めるだろう。

個人的にとくに印象に残ったのが後者で、取材した多くの方が、「次の作品を作るための資金をいかに得るか」を非常に重視されていた。ものづくりには時間とお金がかかる。一つの作品を作り上げるまでにかかわった多くの人たちに、できるだけ多くの対価を還元したいという意志を、皆さんから感じた。その業界で働く人や自分たちの文化を守ることに、作品の知的財産権を守るというこ

とは、限りなくイコールなのだ。

フランスの国家予算に示める文化予算の割合は、日本のおよそ10倍だという〔(一社)芸術と創造「諸外国の文化予算に関する調査」(2016年)より〕。くりかえしになるけれど、ものづくりにはお金が必要だ。国からもらえるお金が少ない日本だからこそ、作品から生まれた利益がしかるべき権利者に手渡されなければ、文化の担い手がいなくなってしまう。



「すごいぞ！はたらく知財～14歳からの知的財産入門」内田朋子・萩原理史・田口壮輔・島林秀行 著
監修:桑野雄一郎(高樹町法律事務所)
四六判変型並製/256頁/1500円
+税/晶文社/2019年

権利の主張をこわがらない

そもそも著作権が必要とされるようになったきっかけは、活版印刷技術の発達により、海賊版が世間に出回るようになったことだという。1710年にはイギリスで、世界で初めて著作権保護のための法律が制定され、1886年には国際的な著作権保護条約であるベルヌ条約が結ばれた。音楽著作権管理団体にかんしても、1851年にフランスで設立されている。こうした歴史はすべて、著作権者や版元など、作品の創作に貢献のあった人たちが、自分たちの権利を主張しなければ生まれなかったものだ。

ベルヌ条約の発案者であるフランス人作家のヴィクトル・ユーゴーは、「書籍は書籍として著作者に帰属します。しかし、思考としては人類に帰属します。あらゆる知性はそこに権利があります」という発言を残している。

音楽著作権管理団体の設立にかかわった3人の音楽家は、カフェで自分たちの音楽が無断で演奏されているのを不快に思い、店にたいして飲食代金の支払いを拒否したという。

情報伝達の手段が変わっていくにつれ、知的財産権のあり方も見直されてきたが、どの転換点でもきっかけとなったのは、権利を主張する人々の

声だ。生まれたばかりの伝達手段では、きまりやしくみが整っていないことも多い。どこかの誰かが、自分の利益を主張するなんて「恥ずかしい」「嫌われる」と躊躇している訴えは、歴史の中でみると、必然の主張なのかもしれない。

なぜ広がらない？ 知財教育

それにしても、世間は人の手が作り出したもので成り立っているのだから、この世のほぼすべての人は知財にかかわりながら生活している。にもかかわらず、自分事として著作権や特許や商標について考える人はどれだけいるだろうか。

ものづくり教育に特化した美術大学などでも、まだ十分な知財教育が行われていないのが現状だという。コピーやパクリ問題のニュースが増えていることもこれと無関係ではない。ものづくりのノウハウを身につけても、作品やアイデアの価値に鈍感なようでは、片手落ちだ。

ものづくりにはドラマがある。一つの作品や発明の影には、たくさんの挑戦と失敗がある。そうした努力にたいする想像力を養いましょう、そして敬意を払いましょう。かたくるしく見える法律の背景には、こうした人間らしい体温があるのだということを、取材をとおして知った。

知財を学ぶことは、インターネット時代のリテラシー、「顔の見えない他者への敬意」を身につけることにもつながる。これからのAI時代、創造性を伸ばすことと同時に、ますます大切な教育分野になることは間違いない。

知財は全教科対応の万能コンテンツ

とはいえ、子どものころから権利や法律などやこしいことを教えてしまうと、ウンザリされてしまうことは容易に想像できる。きまりを学ぶ前に大切なのは、創作の喜びを知り、作者への想像力を養うことだろう。

学校教育では、国語や美術、技術家庭など、創作にかかわる教科がたくさんある。プログラミングや発明品も含めれば、理数系教科だって連想さ

れる。授業の中やその延長線上で作り手や発明家の苦労に思いをはせること、作品を守るしくみについて教えることは、そんなに難しくないはずだ。目の前の勉強がさまざまな職業に結びついていることも実感できる有意義なコンテンツだろう。

意外と人間的でおもしろい知財の世界

今回の本は以下の11の業界に的をしばって取材した。さまざまな業界で活躍されるプロの方々のお話を聞くのはもちろん楽しく、取材時は「へー」「ほー」「そうなんだ！」の連続であった。世の憧れの仕事のリアルを伺い知ることができるという意味でも本書の内容は貴重だ。法律について話を聞いているのについて深い話になってしまいがちなのは、知財をうみだす創作活動が人間の尊厳に深くかかわっているせいかもしれない。

趣味で創作を続けたい人にも、創作を仕事にしたい人にも、その予備軍である中高生にも、そして彼らを見守る大人の方々にもぜひふれてほしい、意外と人間的でおもしろい知財の世界だ。

(あさま むぎ：晶文社)

【本書に登場する方々】

- 1 文 学 谷川俊太郎
 - 2 音 楽 ユニバーサルミュージック
 - 3 映 画 東宝 (『シン・ゴジラ』)
 - 4 舞 台 草刈民代 (バレエ)
 - 5 テレビ TBS テレビ (『半沢直樹』)
 - 6 芸 能 サンミュージックプロダクション
 - 7 キャラクター
熊本県庁くまモングループ (くまモン)
 - 8 アニメ サンライズ (機動戦士ガンダム)
 - 9 ゲーム
コナミホールディングス (実況パワフルプロ野球)
 - 10 伝統工芸 細尾 (西陣織)
 - 11 アート 東京国立近代美術館
- + α JASRAC / お笑いタレント ゴー☆ジャス
/ フレグランスアドバイザー MAHO

広く深い学習支援を目指して

星野 千鶴子

4月から勤務校2年目に入るので、先生方や生徒さんに「まず図書館に行こう」と思われるようにしたいと思っています。そして関心のあるテーマの解決に役立つ道しるべ（パスファインダー）を沢山作りたいです。先生や生徒が図書館に望むテーマは、先生は授業に役立つ何かを、生徒は授業以外、自由研究、夏休みの宿題、修学旅行と枚挙にいとまがありません。

パスファインダーができると先生方には、印刷資料をお渡しします。同じ内容を小さい紙で資料にして図書館に置いておくと、生徒が手に取って本を借りていくこともあります。その場合、色紙の方が眼に止まります。貯めておくが必要な時にいつでも手渡せ、年月が経って資料の追加も削除もできて、時代の変化なども学べます。

パスファインダーの作り方

先生が「新しい人権」というテーマを持って、図書館にみえた事がありました。まず一緒に探しました。その時は、なるべく広い視点から本を探すようにしています。そして先生が図書館から借りてくださった本のリストを基に、タイトルとキーワードと本のリストなど三つを基に小さなパスファインダーを作りました。

自校で持っていない本は購入したり、学校間物流を活用して他校から借りています。私の力で全学科でパスファインダーを作ったの対応はできませんが、国語で良く使われる「平和について考える」「アウシュビッツ」「日本の戦争」などのテーマや資料は紹介できます。

社会科の日本地理の本も七つの地方別に特色があり、希望があれば直ぐに整えられます。けれども、司書は授業をしません。まずは先生がどんな授業を考えておられるのか伺い、司書の関わり方を考えます。でも、私が「いつかはきっと」と思うテーマのパスファインダーを、前以て用意する時もあります。蒔いた種はいつか芽が出ると信じて……。

夏休みのパスファインダー

夏休みの宿題に、自由研究を選んだ生徒へのお助けアイテム「自由研究のたね」を懸念に作ります。自由研究についての本は時期がくると書店や図書館に並びますが、実験の方法で終わっているようなのが残念でした。実験をした後、その結果をどのように考察していくか、どの本で深めていくのか知りたいたいと思っていました。ここ数年出版された実験や観察の本には、なぜそうなるかということを書いてある本も出てくるようになりましたので、理科女の私は喜んでいきます。

まず司書が、こんな本もあるよという道しるべを作りたいのです。いろんな視点から物事を見る大切さを知ってもらいたいです。

理科でなくても、自由研究は出来ます。社会科の「災害について調べる」というテーマを選んだとして、歴史的なことを調べたいのか、メカニズムについて知りたいのか、災害の対策について調べたいのか、それとも自分の住んでいる所の対策か日本の他の地域についてなのかなど資料もアプローチによって違います。時間がかかると思いますが丁寧に作りたいと思います。その場合、自校にある本を3冊は必ず紹介しています。

昼休み 忙しくてツイツイ…

昼休みには生徒が本を探しにきます。スタッフ側よりお客さんの方が多くて期待に添えないこともあります。そこで、「調べたいキーワードとクラス名、名前」を書いた小さなメモをもらうことにしています。そして、その後の休み時間に、数冊自校の本を数冊リストにして手渡していますが、メモを残さない生徒もいます。

寒くなったある日の昼休みに「雪の結晶の本はどこ？」と生徒が来ました。分類番号451の棚から『雪の結晶』（ケン・リブレクト著／河出書房新社）と絵本『雪の結晶ノート』（マーク・カッシーノ著／あすなる書房）を手渡し、フリーペーパーの「なる

ほドリ 12月号」の記事とその元ネタの「NEWSがよくわかる」の12月号を手渡し、私はカウンターに戻りました。でもその生徒は結局借りにこなかったし、メモも出ていませんでした。生徒から質問を受けて棚を指さすと、司書はその方向に進む生徒の姿を確かめながらも、次々のお客さんの希望に沿う内に午後の授業が始まります。貸出ノート(昼版)にも、件の本の書名はありませんでした。それでいて私の方は、書架から『雪はなぜ六角形なのか』(小林偵作著/筑摩書房)を見つけ、『雪の写真家ペントレー』(ジャクリーン・ブリックス・マーティン/BL出版)を思い出し、その後もどんどん広がりましたので、残念でした。

G これからの希望! 課題?

生徒に、本を探す楽しさを感じてほしいのです。探し当てた本が伝えてくれる情報の価値は、言いようが無いほど深いし、自信を持たせてくれると思っています。今度のオリエンテーションを、グループ制にして、項目はこちらが決めて、浮かぶキーワードを沢山書き出して、最後に書架で本を探してシートに記入する方法にできると良いなあと思っています。それが出来たら本を探した時の嬉しさを経験できますが、現実には、授業で使う本を図書館で見つけて、調べたい事をキーワードで見つけて、インターネットで調べてくることを宿題にする授業が増えていくようです。(ほしのちずこ: 中学校図書館司書)